

## 生涯学習社会における国際教育（その二）

### 二 見 剛 史

本稿は、約10年前に発表した同題の論文を「その一」とし、それを補完する形で内容をととのえた。すなわち、①面から球へ、②世界は一つ、教育は一つ、③地球村・地球家族、④「もったいない」「ありがたい」、「⑤国際理解と平和、⑥いのちを輝かす教育に検討を加えながら、⑦スクールと地域の連携、を追加した小論である。

論述の背景には約40年前から入会しているW E F (The World Education Fellowship)「世界新教育学会」の活動がある。国内研修を重ねながら海外訪問にも精励し、そのたびに紀行記をまとめていたので、体験学習の中から教育的提言もいくつか出来たと思う。W E Fのほかにも海外視察や交流の記録が役立った。

各地で実行されている「国際教育」の実践にも留意し、新しい課題も次世代のために示していこうと努力した。地球市民としての自覚を大切に、研究仲間語りかけることとしたい。

### はじめに

世界の教育環境は、この半世紀、大幅に変化した。特に地球環境に対する危機意識の高まりから、それまでの

人間本位・国家中心の教育観を是正し新しい世界を人々は求めている。「私たちの生き方はこのままでいいのか」という根本的・哲学的な問いかけに対し、われわれはどんな答えを用意したらいいのだろうか。

志學館大学文学部『研究紀要』第二十三卷第二号（二〇〇二年一月発行）に、私は、同題で国際教育の在り方についての提言を試みている。その後、時は刻々と推移し十余年を経ようとしている。生涯学習の内容や方法が各方面で検討されつつあるというべきであろうか。

この辺りで「その一」を再検討しながら、「その二」では新鮮な角度で論考を深めたい。教育学研究は、他の分野に比べて常に理論と実践の調和を求めている。理論形成の前提として体験学習から得たものを重要視するということになるう。

### 一 「新教育」運動の推移

二〇〇三年七月、世界新教育学会の国内版を志學館大学（コスモスホール）で開催させていただいた。正式名称は「WEF国際教育フォーラムin鹿児島」である。会議のメインテーマは「21世紀の生涯学習 (Lifetime Learning for the 21 Century) Ⅱ 地域と学校の連携Ⅱ」である。<sup>①</sup>「その一」は大会実行委員長としての責任を感

じて執筆したものである。ちなみにWEFとはThe World Education Fellowshipの略称である。世界的仲間づくりを目指している。

「その一」の内容構成は次に並べるキャッチフレーズで明確となる。すなわち、

- ① 面から球へ
- ② 世界は一つ、教育は一つ
- ③ 地球村・地球家族
- ④ 「もったいない」「ありがたい」
- ⑤ 国際理解と平和
- ⑥ いのちを輝かす教育

の6柱にそって体験学習を踏まえた理論を組立ててみようとする努力したのである。

東京で汎太平洋新教育会議が開催されたのは一九三五年、その時のテーマは「日本文化と教育」であった。<sup>②</sup>野口援太郎会長のもとで日本にも新教育協会が創設されたのは一九三〇年、世界の創立総会がフランスのカレーで開かれて十年目にあたるが、初回のテーマは「子どもの

創造的自己実現」であったことに比べれば、わが国では国家色をはじめから打ち出していたことになる。

一九三九～四五五年は第二次世界大戦期、日本の「新教育」活動も一九四一～五五年までは停止状態に入る。日本での再発足に尽力した人は小林澄兄会長だった。一九五七年、早速東京で教育世界会議が開催される。その時のテーマは「世界社会と若き世代」、戦後復興にふさわしく「世界」が見えてきた。

一九七〇年代に入ると、毎年のように国際会議が開かれた。会場とメインテーマを並べてみよう。(これについては「その一」では触れていない)

○一九七〇年 ロンドン (イギリス)

「教育環境——初等教育へのアプローチ」

The educational environment Approaches to

primary Education

○一九七二年 ブリュッセル (ベルギー)

「明日の社会のための新教育」

New Education for Tomorrow's Society

○一九七二年 フォルカーク (スコットランド)

「人類の未来…生存への計画」

The Human Prospect—a program for Survival

○一九七三年 東京 (日本)

「新時代を開く教育、教師は何をなしうるか」

Education for the New Era—What can Teachers

do?

○一九七四～五年 ボンベイ (インド)

「より充実した生活を求めて教育革新」

Innovation in Education for a fuller Life

○一九七六年 シドニー (オーストラリア)

「生きている教育……今……」

Living Education…Here…Now!

○一九七八年 イプシランテ (アメリカ)

「相互依存の世界に生きる人間形成のための学習」

Learning to Become a Person in an Interdependent

World

とつた具合に、ほぼ毎年開催されている。

その後、一九八〇年代に入ると、韓国・マレーシア・南アフリカなど欧米以外の国も名乗りをあげ、一九九四年には日本でも再度開催された。

以下、内容検討のために、テーマの推移を辿ってみる（翻訳のみを列記）。

- △一つの世界における教育（イギリス）
- △先進国ならびに発展途上国において、国際理解と平和実現のために教育の果たす役割（韓国）
- △芸術を必要とするものは誰か（オランダ）
- △教育と人間の価値・特に環境との関連（インド）
- △思いやりの社会のための教育（オーストラリア）
- △学習者が自分で管理する教育（イギリス）
- △激動する世界における教育（アメリカ）
- △地球家族のための教育（日本）
- △教育と環境——公平かつ持続可能な開発に向けて（マレーシア）
- △よりよき世界のための教育——ビジョンからアクションへ（オーストラリア）

△惑星・地球をつなぐ教育（南アフリカ）

テーマ設定は大会ごとに各支部で決めてゆく。国際教育への各国各地域の関心や取組みの内容が示されるわけだ。その推移を十年おき位に通観してみると、相互理解の波が及んでいく様子に感動する。

W E F 活動を支えている学問分野は主として「教育学」だが、例年の積み重ねが新生面を打出している流れを見るようだ。「世界」とか「地球家族」「惑星・地球」が国際教育を考えるための基礎に置かれつつあると私は実感した。

大会開催国の中にはまだロシアや中国は入ってこないが、私にとって最初の訪問国であったインドで個人参加のロシア人から英語で声をかけられたり、日本や韓国で留学中の中国人が日本語で語りかけたりすると「世界は一つ」に向けて、教育環境も少しずつグローバルな方向で整えられていることに気づかせられた。南アフリカ大会の折りに提案してみた「面から球へ」のキャッチフ

レースは、これまでの国際交流で学びとった理論といえそうである。

## 二 「世界は一つ」が意味するもの

21世紀に入り、私たち戦中戦後を生きぬいてきた世代に課せられた仕事の中味をじっくり検討しなくなった。二〇一六年は南米大陸で初めてのオリンピックが開催され、ブラジルが脚光を浴びていた。テレビ映像が世界を結んでいる。それはスポーツと文化が一体化した姿だった。メダル数を競い合うことよりも世界新記録を喜び合い讃え合う姿には国境を越えた地球市民の成熟さが見える。国土の面積や人口では世界第五位に位置づけられるブラジルの人々が世界各地からの参加者と交流する中で学びとったものは大きいだろう。パラリンピックの様子にも深い感動を覚えた。今後、国家と個人をどのよう位置づけられてゆくのか。時代の推移を見守りながら二〇二〇年の東京オリンピックの情景を予想する努力も地球市民たちに課せられていると思われる。

そもそも、一人の人間が文化のすべてを具備することはできない。個人の次元では容易でない。しかし、国際社会の理想像を追求するとき、当面は国家とか地域とか、いわゆる「面」の次元では用意されるべき内容が教育や文化の時空であろうか。

大正デモクラシーの中から主張された理論が「全人教育」であった。英文で示せばこのようになる。

Education should contain the human culture in its entirety. Therefore education has to be the whole man education. It means that the teacher has to be a whole man himself, with the whole of human culture embodied in him.

世界新教育学会の小原国芳は「全人」の内容を真・善・美・聖・健・富の6価値で具体化された。その後、稲富栄次郎会長の発言で、日本のWEFの目標は、

One and only education for only one world.

訳して「世界は一つ、教育は一つ」となっている。一九八〇年のロンドン大会では、Education in One world(一

つの世界における教育）をメインテーマとしていたが、稲富提案が出されたのはそれより五年前である。先頃の日本支部理事会でも、このフレーズをもっと大事にしたいナアという話が出されていた。

稲富会長は談話の中で「国際研修では異文化への理解をねらって学習に精出さねばならぬ。単なる名所見学の観光では申しわけない。世界共通の課題を共有できる人間にならねば」と述べておられた。教育哲学の高く深い理想が示され、若い世代を励ます存在だった。

### 三 地球市民の心構え

「地球村・地球家族」は「その一」3番目の論点である。ユネスコが決め、世界中の教育界が目標とした国際児童年のテーマ「わが子への愛を世界のどの子にも」は私たちの心に灯を点した感がある。つまり自国本位ではなく、地球市民として生きてゆける人へと自らを育てるための呼びかけ、一九七〇年代以降の動きとして注目される。日本がW E F活動として「地球村シリーズ」を出版<sup>3</sup>

しはじめたのはインド（ボンベイ）大会の時である。『地球村ボンベイ』（一九七五）、『南十字星の村々』（一九七七）〜『風車のある村々』（一九八四）、……と小さな歴史を刻んでいく。一九九四年の東京大会では「地球家族のための教育」Education for a World Familyを大会テーマに掲げていた。さらに先述の二〇〇一年南アフリカ大会では「惑星・地球をつなぐ教育」Education Linking the planetとなつて、テーマの背景に環境問題が読みとれる。

その四半世紀前、インド訪問の折りに私たちが学びとつた世界的課題をふりかえつてみると、①世界的不況、②住宅問題、③人口爆発、④大気汚染、⑤地球資源の破壊、⑥人種差別等々。インドの総人口は訪問時の六億人から今やその倍、十二億人に達したとされるが、私たちが見た四十年前の街角にもファミリープランの幟がいくつも立ち並んでいた。多民族、多宗教、多言語、多階層の国、アジアで最古の文明を誇る一方では太古さながらの貧しい生活も見られる。

「その一」で記述した解説を改めて分析してみると、地球村とか地球家族を云々する前に人口問題や環境破壊現象を世界全体で考えなければならぬと切に思うのである。

インドだけではない。中東、アフリカ、南米の諸国等々、今難民移動で苦勞を強いられている世界全体の現状に私たちは大いに関心を持たなくてはならないと考える。人間といえども大自然の一部なのだから。

#### 四 報恩感謝の生活

「もつたない」「ありがたい」という表現を打ち出し、人は片山清一先生である。「その一」の中で已に論述したわけだが、「その二」において論の内実を改めて紹介する。<sup>4)</sup>

一九七六年八月二十九日、WEFオーストラリア大会の全体会議が行われた。テーマは「地球理解のための教育 (Education for Global Understanding)」、テレビ局も録画していた。重要な部分を要約すると次のようにな

る。

まず、人類全体の問題として解決が要請されている危機的状況を分析、日本の立場を戦後の経済発展との関連から説明したあと、地球的理解の必要性和そのための提言がなされた。——ユネスコ憲章に「人の心の中に平和のとりでを」と宣言され、世界各国は国際理解の教育をすすめてきている。しかし、その根底にはまだ国家的見地から考えたり批判したりしたものが残されており、また、理解の仕方も知的性格にとどまって感情的情緒的な域まで到達していない。「地球的理解」に立てば、エネルギーの開発が環境の破壊をもたらし、一国の公害が地球の汚染へとひろがることを認識しえよう。一人の過大な富の所有は地球上のどこかに住む多くの人たちの過度な貧困を招いているのだという理解、人類だけが繁栄すれば万事良しとするのでなく、全自然に対して温かい感情をもって接してゆける態度が望まれる。……

さて、日本人は、古くから日常生活の中で「もつたない」「ありがたい」という言葉を使ってきた。われわ

これは、今後世界の地球人として生きてゆくために、この二つの伝統的日本語を若い人たちも納得できるように普及してゆきたい。それが地球的理解への道である。

そして最後に日本支部の運動スローガン・One and only education for only one worldを紹介、これは前会長・稲富栄次郎博士の遺言でもあることをつけ加えた。

戦後の貧困生活を体験した日本人なら誰でも首肯されるであろう「質素儉約」の生活態度、思うに、今、日本で欠けている教育内容・方針は「報恩感謝」ではないかと思う。筆者は地元住民（霧島市民）として薩摩義士顕彰会に所属し、その会長をお引受けして十年になる。宝暦治水（木曾三川）に励んだ薩摩藩の人たちに対し、岐阜県や周辺の住民たちの子孫が今でも「報恩感謝」の意を表しておられることに対しその誠意に感動して姉妹交流を重ねている。顕彰活動の継承は半世紀以上続き、毎年青少年の相互訪問、五月は鹿児島で、四月と十月は岐阜で報恩の儀式が行われ参加しあう。

こうした姉妹県交流は全国では幾組もなされているこ

とだろう。国際交流も然りである。人間関係の基本は相互敬愛だと思うとき、今日さらに未来へ向け、道義高揚、豊かな心を育てる顕彰事業は村づくり、マチづくりの基本だと思わずにはおられない。

古今東西の歴史を照合しながら、偉大なる仕事を完遂した先人は国際的見地も加味して讃えあう。それは故人についても功績を顕彰する努力、研究者たちはこのことをしっかり肝に銘ずべきであろう。小さくは、家族や集落の先人たちについても同様の配慮が大切だといえる。

## 五 国際理解と平和

地球村探訪を重ねる中で学びとつた場面が韓国でのW E F大会だった<sup>5)</sup>。出席者数が343名、参加国は27、アジアでは韓国や日本を先頭に、インド、フィジー、ホンコン、インドネシア、ネパール、パキスタン、フィリピン、シンガポール、タイワン、タイ、マレーシア等から数名ずつ参加していた。地域的にはオーストラリアからの18名もアジアの仲間とすべきだろう。アメリカ18、イギリス



14で欧米系の国々は少数派、中国や北朝鮮からの参加者はまだいない。韓国側から見て外国人約二百人のうち日本からの75人は多い。W E F会員41名の残りは比較教育学会関係で広島、九州、筑波等の各大学から見えていたようだ（筆者はW E Fと比較教育学会の両方に属している）。参加者の中には若い留学生たちも見かけた。ちなみに、台湾から来た若者は筆者が東京に居た頃の留学生で、環境教育に関する日本製のビデオの字幕に中国語を入れて筆者にもプレゼントしてくれた。お互いに地球市民としての友好関係にあるようだ。国際教育の現状を示すひとコマといえよう。

ソウル大会の開会式で文教部長官の李奎浩氏が述べられた祝辞に注目し、「その一」の中にも紹介しておいたが、その中に「地球全体は異なる国々の人びとを何らかの方法で結びつける単一の生活圏となっております。……諸問題は個々の国に限られる狭い性格のものでなく国際的なものであり……各国が問題解決の努力の基礎を相互理解と協力に置くべきであるという明らかな要請を

もたらしめます。……」<sup>(6)</sup>と真剣に訴えておられた態度に私たちは深い感動を覚えた。一言で纏めるなら、教育の役割は「相互理解と平和の実現」という国際社会共通の目的を達成することだと主張されたのである。

筆者は先頃「日韓トンネル建設問題」に関心を持ったことがある。アジアハイウェイ構想につながる大型プロジェクトだと理解したが、W E Fの「もつたない」精神に照合すれば、経済効果を主張する前に、現世代が今なすべきことを優先した方がもつとよいのではないかと判断した。

W E F会議の合い間をぬって韓国の有識者とも語り合ってきた。「日韓両国で共通の歴史教科書を編纂してみたらどうでしょう」という筆者の提案に対し、「まだ時期尚早でしょう。日本人はまだ過去の侵略戦争を反省していないように感じられますよ……」という回答であった。国家レベルでは加害被害の疑心暗鬼のやりとりだが、庶民レベルで考えてみると、一般の人々にとつて「平和」な国際社会の実現こそ最優先の目標である。朝

鮮半島の向こうに住む中国人の中にはアジア人同志の相互理解、mutual respect を発表している人たちもおられる。私たちの世代が互いに国際交流を推進する中で平和への道を開拓しなければ一体誰が平和を達成してくれるだろう。地球市民をめざす私たちとして取るべき態度は何であろう。未来に通じる道を開拓するにあたってみんなで吟味し実践すべき課題をしっかりと見据えてゆける判断力、行動力の養成が、今求められているのではないだろうか。

#### 六 いのちを輝かす教育

太平洋戦争で多くの犠牲者を出し、土地を奪われた県として沖縄がある。志學館大学に勤務する者の義務を果たすべく、学生募集や現地試験実施のため20回以上出張した経験の中で私が学びとったことは「ぬちどう宝」つまり生命の尊さであった。毎年六月二十三日「慰霊の日」になると沖縄のことがいつも思い出される。先輩（元大分大学長の野村新氏）と組んで教育原理の本を出版した

折りに、私たちは『いのちを輝かす教育』を本のタイトルに選んだ。教育学研究の使命は平和な世界の基礎となる「しあわせ」——心身共に健康な教育環境をつくる仕事だと教わったし学びとった。そして、「いのち」を大切にすることの意味をみんなで考える社会の存在こそ宝であると自覚したわけである。

「その一」ではアメリカ、マレーシア、アフリカでの体験をもとに論述したが、わが老齢を考え海外視察を控えがちな時空の中で「地球市民」の自覚に達した自分の過去をふりかえる。海外研修のたびに思い出すのは世界中の人々が動きまわっている現今の世の中に生きて、世界行脚の年月をふりかえる仕事も意義があるということだ。

『地球市民の旅日記』は世界一周を夢にして生きていた一庶民が年相応にどんな思いで「生涯学習」に喜びを見出したかの真剣な記録集である。決して自慢話ではない。いつも宿題・課題をかかえつつ夢中で走ってきた人生であったが、喜寿といえれば私の場合父逝きし歳、父の

遺志を受け継ぎながら生きてこれたのは母国が戦争のな

い時代を先代たちが築いてくれていたからに他ならな  
い。草深い山里に生まれ、母子家庭に育ち、志を立てて

上級学校に進み師友に恵まれ子福者でもあった父、子育  
てのさなかに父祖の地に疎開し、農作業に精いっぱい尽  
し自給自足の質素な生活に耐えていた母、しかも、昭和  
前期に二十代の息子や娘を続々に先立たせた苦悩の壮年  
期でもあった。幸い末っ子らと金婚旅行が実現し、夫亡  
き後は里人たちと喜びあう笑顔の晩年を与えられた。

論考の中にこうした私的な問題を述べるのはこれ以上  
許されないが、竹馬の友や集落の先輩後輩たち、さらに  
広く社会一般のさまざまな人生航路を経てきた人々と語  
り合う時、類似の現象は随所に存在しているのだと気付  
いた。恵まれない立場に生きてきた地球市民は数え切れ  
ないのだ。国際社会で考えてみると初めての海外研修地  
に選んだインドではこの半世紀に人口が六億から十二億  
と倍増している事実を隣国人としてどう考えたらいいの  
か、インドの一般庶民は一体どうして生きぬいてゆける

だろうかと心が痛む。

## 七 スクールと地域の連携

生涯学習社会における国際教育を論ずるにあたり、前  
編「その一」の視点を基軸としたわけだが、新しい論題  
として「地域連携」を研究の対象に加えておく。特に、  
近代の学び舎である「学校」の位置づけを考えてみたい。

教育学の周辺科学分野として「大学史」がある。筆者  
は一九六〇年代の後半に広島大学の横尾壮英氏、東京大  
学の寺崎昌男氏や中山茂氏らに導かれて大学史研究会の  
設立に協力した。その出発段階で学んだことは、スクー  
ルという呼称を大学・高等教育機関で用いることもある  
という指摘だった。

学校化社会の進展に伴ない、従来学校教育と対比され  
ていた社会教育の分野が生涯教育から更に生涯学習と呼  
ばれるようになり、学校概念が再検討を迫られたと言わ  
れるが、世代間の教育機会を平等にするためには従来の  
学校教育と社会教育は一体化ないし再編成されなければ

ならないということになる。つまり、学習者の自由な意志に基づき、学習者個々人に即応した方法で推進する「生涯学習社会」という設定が教育改革の目玉になった。老若男女すべての人たちが文化の創造者として共生する社会、その内実が「生涯学習」だとすれば、「ゆりかごから墓場まで」を対象とする全世代を受入れる学校でなければならぬだろう。

学校とせず「スクール」としたのは生涯学習社会における「学び」の場は、さまざまな形態になるからである。地球全体に散在している「地域」——そこに芽生え根付いているスクールが社会全体とどう連携するのか。逆に国際教育の場となるスクールを支えていけるのはどんな地域なのだろう。

現代は「生涯学習」の名のもとに、全世代が楽しく学び合う態度を要求されている。尤も、単に学び合うといっても年齢相応に大人から子どもへの指導助言はなければならぬ。一方、行政は教育環境の条件整備で力を発揮するのが本務であろうが、近代教育制度の反省に立

てば、現場の教師たちが伸々と専門能力を発揮できるように支援すべきだという反省になる。これは単に教育の世界に限らない。一般行政においても教育行政的スタンスがもつとあつて然るべきだと考える。政治や経済は「縁の下の力持ち」に徹してほしいものだ。

本来、人類は農耕社会を経て都市文明を育ててきたのである。混迷せる現代世相を改善するためには、初心忘れることなく、それぞれの原点に帰って活路を見出さねばならぬ。ルネッサンスとは「原点回帰」の謂であると教えられた。<sup>(7)</sup>

大学制度を回顧すれば、戦後真先に育てられた「教養教育」を吟味し、再度復活したい気がする。<sup>(8)</sup> 復活しないまでも教養なる言葉に込められた先人の知恵を伝承・活用してこそ生涯学習社会を生きる地球市民にふさわしい学問的雰囲気が培われそうだからである。

スクールと地域の連携がうまく作動している実例とし

て地元（鹿児島県霧島市隼人町）の方々と視察研修したのがベルギーのULBことブラッセル自由大学だった。<sup>9)</sup>訪問したのは二〇〇四年十月十七日、旧隼人町とフランスのウイイ村が友好都市関係にあるので、その間をとりもった志學館大学の岩橋恵子教授から呼びかけられ、始良町の泊掬生さん（草文美術館長）や嘉例川駅の活性化に熱心な山木さん、日当山の池田君らとぶどう狩りなどを楽しんだあと、ルーブル美術館も見学（ウイイには小さな学校博物館もつくられていた）後、この日ULBを視察したのだった。

見学コースは、まず、本部施設の展示会場で、ルメール女史から入念な説明を拝聴した。通訳はジャン・シオン氏夫人の成子さん（鹿児島県出身）である。この場所は一五二九年に建てられた修道院、自給自足の生活を営む工夫の中でビール産業を興し、再建資金とする。チーズも作った話など興味をひかれた。ビールは蜂蜜の香りがするすばらしい味という。

説明は一貫してキリスト教史、西洋文化の講義だっ

た。筆者が志學館大学等でとりあげている内容も出てくる。一九八四年、オランダからベルギー・東西ドイツ・チェコ等中部ヨーロッパ視察の途次一泊したエルフルトは確かルターの活躍舞台だったことを思い出す。私の研修ノートには5頁にわたるメモが残された。若くて有能な女流研究者のエコミユゼにかける熱意がひしひしと伝わってきた。

昼食時は近くのレストランで和やかな国際交流。午後は駅舎を活用した施設見学。私たちの視察目的が鹿児島県霧島市にある嘉例川駅や横川駅のこし方ゆく末を考慮するためのヒントを得たいことにあつたので興味をそそられた。まず、駅舎が大学のサテライト施設に転じていることに感動する。環境研究センター長はULBの生物学者、大学では研究コースとして「グリーンクラス」と呼ばれる野外学習を設けているらしい。学生たちはこの駅舎跡に宿泊し研究を重ねているという。現在は生物学が主体だが、時には地理学等の研究者も足を運んで共同研究をするそうだ。統合的な環境研究の企画も近いことだ

ろう。

旧駅舎に隣接して「農業機械の博物館」があった。倉庫らしき空間に大小さまざまな農業機械・道具が所狭しと並べられていた。解説パネルは写真入り、早速、帰国後、嘉例川駅の「小さな博物館」にも応用したいネという話になった。この建物は参加する子どもたちの宿泊施設として改修するらしい。

エコミューゼはもともと無収益団体なので、こうした文化事業には国から援助金をもらえることになっている。設立母体のULBも援助金を出す。地元住民を加えた職員の中には研究者はもとより技術員やアニメーターもあり、普及教育活動を行っている。こうした文化的プロジェクトに「失業者」を雇用し補助金を出しているのも面白いと思った。

訪問者は年間八千〜一万人、入場者の七割は子どもたち、生涯学習セミナーとして観光も兼ねた文化観光ツアー等も企画されている。山間のエコミューゼも次第にオープンマインドな地域に変貌しつつあることを察知し

た。

地域資源を生かして新しいタイプの「スクール」をつくり出してゆくこと、これは地球市民に課せられた大切な事業だと思う。生涯学習社会の内実を整えるために、私たちが研修視察の成果を紹介しあいながら、新鮮な感覚で新世紀の教育環境を整えなくてはならない。

繰返すまでもなく、スクールとは全世代を対象とする生涯学習・文化サロンである。大学アカデミーと命名してもいい。これまでの世界では、学ぶことと教えることとは分離しがちであった。しかし、本節で論じたように、大学と地域の関係は相互連携の学習方式、そこでは、全世代につながるスクールとしての生涯学習の場所が形成されつつある事実だ。地球市民はこのようなスクールから生まれてくるのかも知れない。生涯学習社会の一面を見せている、世界の最先端を訪問した思いであった。

むすび

本稿は、生涯学習社会における国際教育の理想を追いながら、前編の解説に加筆しながら事例紹介にも努力する内容となった。筆者の小さな実践報告をとり入れた次第である。世代を超え国境を越えて論じあえることを期待して、一旦ここで筆を擱く。

(志學館大学名誉教授)

〔注〕

- (1) WEF 国際教育フォーラム in 鹿児島に関する資料としては、二〇〇三年七月二六日配布の『21世紀の生涯学習』(B5判276頁)及び世界新教育学会企画・鹿児島大会実行委員会編集による記録『新教育の波うちよせる鹿児島にて』(A5判156頁)を参照。
- (2) 新教育運動の推移については、前掲『21世紀の生涯学習』144～155頁に詳しい。
- (3) 拙著『地球市民の旅日記』二〇一六年九月、国分進行堂刊 7頁を参照。
- (4) 同書 19～20頁を参照。
- (5) 同書 64～66頁を参照。
- (6) 同書 64～65頁より再引。

- (7) 『新版 はじめて学ぶ教育の原理』二〇一四年三月、学文社刊 第8章第4節、159～163頁を参照。
- (8) 拙稿『Fair pledges of a fruitful tree』『青春群像』より六本松「二〇〇九年 248頁を参照。
- (9) 前掲『地球市民の旅日記』30～32頁を参照。